

令和6年度普及活動の実績
普及活動の軌跡
(Part - 30)



ナシの枝抜き講習会



水田での高収益作物（キャベツ）の栽培



タマネギ機械化実演会



農業経営体育成セミナー視察研修会

令和7年3月
長生農業事務所
長生農業改良普及事業協議会

成果集発刊にあたって

長生地域の農業は、温暖な気候の下、生産者の高い技術と意欲で築き上げられた「長生／ながいきブランド」の産地として発展してきました。

令和6年度の普及指導計画では、「第6次長生地域農林業振興方針」に基づき、「地域を支える多様な担い手の育成・確保」、「力強い園芸産地づくり」、「水田をフル活用した水田農業経営の安定化」、「畜産経営の体質強化」について、農業・農村の活性化、安全な食料の安定供給、気候変動及び自然災害等への対応を含めた普及指導課題に取り組みました。

担い手の育成については、新規就農希望者に対し関係機関と連携を図り、営農開始に向けた支援を行うとともに就農後の早期定着を支援しました。また、安定的な経営を行えるよう、学習の機会を設けることにより栽培技術・経営管理の能力向上に向けた指導を行いました。

長生地域の主力品目であるトマト、ねぎ、たまねぎ、梨などでは、産地の維持・振興に向けて、新たな担い手の確保、機械導入等による省力化、生産力向上の取組、重要病害虫への防除技術の向上等の活動を展開しました。

水田営農については、稲作の収益力向上を目指し技術改善に取り組むとともに集落営農組織や個別経営体の経営改善を支援しました。畜産では、高騰する輸入飼料への対応として、飼養方法の改善やコントラクター組織を利用した国産粗飼料の安定生産を推進しました。

本冊子では、令和6年度の上記活動の中から、「普及活動の成果・報告」4課題、「情報提供」7課題について、生産者の皆様をはじめ、市町村、農業団体、試験研究機関等の協力を得ながら「普及活動の軌跡Part-30」として取りまとめました。

これらを今後の長生地域での農業振興、事業推進等に御活用いただければ幸いです。

令和7年3月

長生農業事務所

所長 大須賀 信宏

目 次

1 普及活動の成果・報告

- (1) なし産地の未来を守る・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
 - ― 新規就農者育成と産地維持への取組 ―
 - 【第24回千葉県普及活動成果発表大会発表課題】
- (2) 規模拡大を目指した機械導入に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
 - ― たまねぎの収穫機実演会の開催 ―
- (3) 水田での高収益作物の栽培に取り組む・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
 - ― 重粘土質土壌でのキャベツ栽培への挑戦 ―
- (4) 収穫期間の拡大に取り組む生産者の増加に向けて・・・・・・・・・・8
 - ― 夏ネギ栽培の基本技術の習得支援 ―

2 情報提供

- (1) 女性農業者の主体的な経営参画に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・10
 - ― 長生地域での女性農業者育成への取組 ―
- (2) 長生地域の青年農業者の育成・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
 - ― 長生農業経営体育成セミナーを通じた仲間づくり ―
- (3) いちごの生産安定と品質の向上・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
 - ― 「長生いちご研究会」活動を通じて ―
- (4) 長生地域で栽培可能な水稻高温登熟耐性品種の検討・・・・・・・・15
 - ― 「にじのきらめき」の栽培適正について ―
- (5) 抑制キュウリの安定生産に向けて・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16
 - ― 酷暑を乗り切る生産対策の取り組み ―
- (6) トマト生産力強化の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・17
 - ― 関係機関が連携し、テーマを絞った生産指導を展開 ―
- (7) 乳量確保及び長命連産による生産性の向上を目指して・・・・・・・・18
 - ― 牛伝染性リンパ腫（EBL）感染対策の取組 ―

3 参 考

- (1) 令和6年度普及現地情報・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
- (2) 主な出来事・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25

なし産地の未来を守る

— 新規就農者育成と産地維持への取組 —

活動事例の要旨

一宮・岬梨組合一宮支部において、生産者の高齢化や後継者不足により、栽培面積と生産者数が減少している現状に対し、関係機関と協力して新規就農希望者の受け入れ体制を整え、2名の新規就農者を確保した。また、園地貸借により約1haのナシ園が新規就農者に譲り受けられた。継続的な改植の推進により「幸水」「豊水」の若返りと「あきづき」や「甘太」などの需要に合った品種への転換が進み、大玉比率の向上により、生産力の強化が図られた。

1 活動のねらい・目標

一宮支部は、生産者の高齢化や後継者不足により平成21年には面積40ha、生産者数60名だったが令和6年には20ha、生産者数29名と産地規模が縮小している。また、ナシ園の老木化による生産量の減少も課題となっている。

産地の維持のためには、新規参加者を新たな担い手として確保、育成し、改植により生産力を向上させることが必要である。また、収益向上に向けて、大玉生産、黒星病対策、異常気象で発生が増えている生理障害への対策などの安定生産技術を推進した。

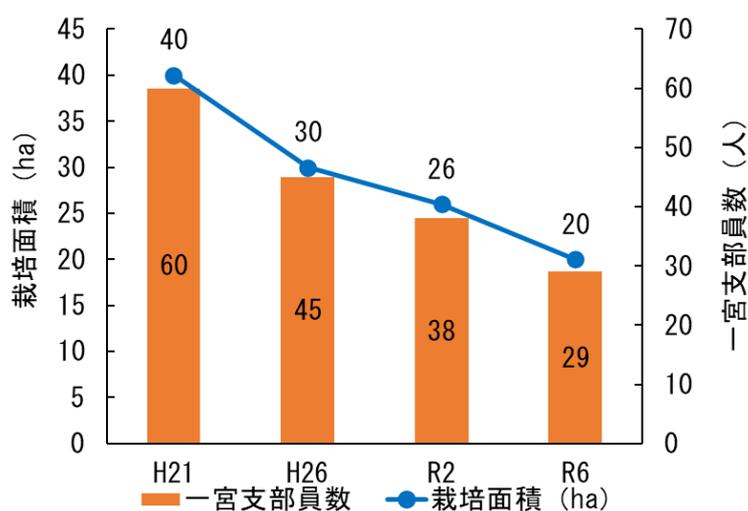


図1 一宮支部の支部員数及び栽培面積の推移

2 活動の内容

(1) 新規就農者の確保・育成

令和元年に産地協議会を開催して果樹産地構造改革計画に新規就農者の育成を盛り込むとともに、長生農業独立支援センターの受け入れ品目にナシを加えることで産地として新規参加者の受け入れ体制を整備した。

令和4年に初めて研修生が確保でき、研修期間中は研修先農家を定期的に巡回し、研修生の技術習得程度を把握しながら、適時技術指導を行った。就農後もJA長生職員と重点的に巡回するとともに摘果や収穫作業等の主要な作業の開始時期には実技を交えて技術指導を行った。

令和5年に5年後の経営について支部全員にアンケート調査を行った。その後、規模縮小または廃業すると回答した生産者を対象に園地の貸し出しの意向について、直接聞き取り調査を行い、新規就農者との貸借につなげた。

令和6年に新規就農者に労働時間や経費の調査を行い、所得向上のためのシミュレーションを実施した。

(2) 改植と品種更新の推進

計画的な改植を進めるため、毎年、改植の意向調査を支部全員に実施し、改植予定者に国庫事業や県単事業など改植に活用できる補助事業の説明会を行った。また、改植がスムーズにすすめられるよう植栽図の作成を支援した。早期に成園化を図るため、2本主枝一文字仕立て、低樹高1本主枝仕立てなどの省力樹形を導入した生産者に対し、現地検討会、講習会などの集団指導に加え、こまめに巡回し、各ほ場の生育状況に応じた追肥やかん水について指導を行った。

高温障害やみつ症が発生する「豊水」「新高」に代わり「あきづき」や「甘太」への品種更新を進めるため、品種検討の研修会を開催した。

(3) 生産安定に向けた技術向上への取組

単価の高い2L以上の大玉果比率の向上に向けて、摘果、新梢管理講習会を実施するとともに、5～7月中旬にかけて10日毎に生産者が自ら測定する果実の肥大調査を行った。農業事務所で調査結果を取りまとめ、仕上げ摘果の基準となる横径を予測し、生産者に周知した。

黒星病対策として、若手を中心に「梨なびアプリ」の講習会を開催し、適期防除に向けた指導を行った。

発芽不良に対しては、発生要因を明らかにするため研究機関の協力のもと、発生ほ場の条件や管理状況を調査し、講習会により対策技術について周知した。

令和5年に中国産花粉の輸入が停止されたため、花粉採取技術の指導を行った。また、授粉樹の育成方法の指導を行い、新植を促すとともに、果実生産用の「豊水」から花粉を採取するためのせん定方法について指導を行った。

3 活動の成果

(1) 新規就農者の確保・育成

2名の新規就農希望者が一宮支部に加入し、1名は令和4年から研修を開始し、令和5年から40aのナシ園を借り受けて営農を始め、令和6年には70aまで規模拡大を行った。もう1名は、令和6年から組合員の下で研修を開始し、同10月に25aのナシ園を借り受けて、研修先組合員の協力のもと、ナシ栽培を開始している。両名とも定期的な巡回指導により管理技術の習熟度が高まり、1年間の研修で栽培技術を習得することができた。

(2) 改植と品種更新の推進

平成28年から令和6年にかけて、一宮支部全体で延べ330aの園地で改植が行われた。「幸水」「豊水」に加え、「二十世紀」と「新高」から「あきづき」「甘太」等への改植が進み、需要に合った品種構成へ変わりつつある。

また、若手生産者1名が「幸水」から「あきづき」の2本主枝1文字整枝への改植を始めた。

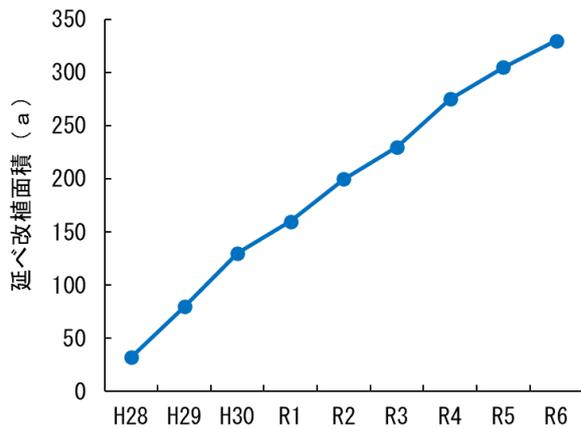


図2 一宮支部における改植面積



写真1 研修生への実技指導

(3) 安定生産技術向上への取組

果実の肥大調査を通じて周囲の生産者と自分のほ場の肥大状況を比較することで、仕上げ摘果作業が進み、令和5年には「幸水」の出荷分で2L以上の果実の割合が約7割となり大玉生産に繋がった。

黒星病等の発生防止に向けて指導を行った結果、令和6年の黒星病の発生を小程度に抑えることができた。また、特に新規就農者においてもタイミングを逃すことなく防除が行え、黒星病の発生は他の生産者と同レベルまで抑えることができた。特に「梨なびアプリ」の活用で、防除に不慣れな新規就農者には他の生産者との防除薬剤や散布時期の比較が可能となり散布薬剤を減らすことに役立った。

発芽不良や果肉障害等の生理障害の発生原因と対策について理解が深まり、果樹研究室と連携し、対策技術として土壌改良についての現地試験を開始することになった。

授粉に必要な花粉量や「豊水」等からの採取方法が理解されたことで必要量の花粉が確保でき、授粉作業には支障がなかった。また、「長十郎」及び「松島」等の授粉樹の新植が始まった。

4 将来の方向と課題

今後、一宮の梨産地を維持していくために、まずは2名の新規就農者の経営を安定させ、しっかり所得が得られるよう伴走支援を続けていく。これをモデルケースとして、さらなる新規就農者の確保・育成を図っていく。

現在行っている園地貸借に加えて、既存の生産者の下へ研修生として入り、その経営を引き継いでいく第3者継承を行うことを検討していきたい。

また全組合員に対し、病虫害及び生理障害対策や改植の推進、花粉の安定確保など産地の維持に向けて支援を行っていく。

5 担当者 東部グループ 小野瀬優哉

規模拡大を目指した機械導入に向けて

— たまねぎの収穫機実演会の開催 —

活動事例の要旨

たまねぎ栽培を規模拡大していくには、機械や雇用を導入していく必要がある。これまでに定植機は導入されているが、規模拡大の最大の制限要因となっている収穫作業を省力化するため収穫機の導入は進んでいない。以前から収穫機を検討しているものの白子町のたまねぎは柔らかく傷がつきやすいこと、倒れた茎葉が絡まりマルチが上手く剥がせないことから当地に適した機械が見出されていなかった。そこで、メーカーと協力し茎葉処理から収穫までの一連の流れを機械で実演した結果、ピッカー以降の工程では課題があるものの、掘起こしまでの作業は機械化できることが確認できた。

1 活動のねらい・目標

たまねぎ産地の維持発展に向けて、作業の省力化に資する収穫機の実演会を行い、規模拡大に向けた機械導入の検討を促すことを目的として実施した。

2 活動の内容

(1) 実演会について

4月23日に実演会を開催し、関係機関を含め33名の参加があった。JA長生、機械メーカーの協力のもと、茎葉処理から掘起こし、拾い上げ作業まで一連の流れ(①～⑤)を実演した。

- ①たまねぎの茎葉処理(茎葉処理機 OCK-1、トラクター)
- ②根切り(たまねぎ用根切機、乗用管理機ナビライダー)
- ③マルチ除去(マルチ巻き取り機)
- ④掘起こし(たまねぎデガー、トラクター)
- ⑤収穫(乗用型たまねぎピッカー、運搬車)。

展示機械としては、たまねぎ直播機の紹介も行った。



写真1 収穫機実演の様子



写真2 収穫機について説明

(2) 実演会取組の結果

ア 実演会時の状況

実演会の前々日と前日は雨のち曇り、実演当日は曇りであり、ほ場は水分を含んだ状態であったが表面は乾燥しており農機は入れる状況であった。収穫時のタマネギの重量は1玉 243 g～590 g となり、階級割合は2 L、L中心の大玉傾向であった。

イ 各種機械の実演結果

2年前に行った実演会ではデガーで掘起こした後の傷が目立っていたが、今回は先にマルチを回収することで掘起こし後の傷は少なかった。ただし、茎葉処理機の高さ設定は微調整が必要であった。ピッカーでの収穫は鉄コンテナに納める際に傷の発生が多くなったため改善が必要であることが分かった(表1)。

今回の実演機を導入して収穫から調製作業までを機械化した場合、費用対効果が得られるのは経営面積4 ha以上であると考えられた。

表1 傷の発生割合

	デガーで掘り起こし後		ピッカー収穫後	
	調査個数	発生率	調査個数	発生率
4月22日	7/100(個)	7%	75/100(個)	75%
4月23日	—	—	95/200(個)	47.5%

※4月23日は鉄コンテナ内側にブルーシートをクッション材として使用

3 活動の成果

今回、新発売の乗用型たまねぎピッカーを取り入れた実演会において、白子町のたまねぎでは実用には至らない結果となったが、部分的には機械の導入が可能であることが分かり、改善点も明らかになった。また、生産者からは根切機やピッカーに興味を示す声が挙がった。更に、4 ha以上に規模拡大する上では雇用を入れるより費用が抑えられることが試算により分かり、機械導入にあたっての目安を農家に示すことが出来た。

4 将来の方向と課題

現行の収穫機(たまねぎピッカー)を導入する為には、白子たまねぎの栽培方法や収穫作業方法、出荷形態などを変更する必要があるため、現状では機械化一貫体系ではなく、根切機等の部分的な機械導入による省力化を進めていく。収穫機は引き続き情報収集を行い、関係機関と協力して作業の省力化と規模拡大に向けた機械導入を目指した支援に取り組んでいく。

5 担当者 東部グループ 高原草、深尾聡

水田での高収益作物の栽培に取り組む

— 重粘土質土壌でのキャベツ栽培への挑戦 —

活動事例の要旨

農地中間管理機構関連農地整備事業で基盤整備を実施している集落営農組織が、高収益作物として水田でのキャベツの栽培に取り組んだ。重粘土質土壌のため湿害により野菜栽培が困難といわれている地域で、排水対策等の栽培技術の導入を関係機関と連携して支援し、収穫に至った。今年度の反省点を活かし、今後は営利的な栽培に向けて支援を続けていく。

1 活動のねらい・目標

農事組合法人 長南町東部営農組合は昭和 59 年に設立され、農家数約 200 戸、水田面積 172ha で水稻、大豆、小麦を生産している。水稻経営は過去 30 年にわたり価格低迷が続き厳しい状況にあるが、基盤整備に伴って導入することになった高収益作物のキャベツ栽培を支援、成功させることにより、集落営農組織の経営改善を図り、地域の集落営農モデルとして育成する。

2 活動の内容

基盤整備事業の事業効果を発揮するため、農業事務所の地域整備課、企画振興課、改良普及課の 3 課に加え、長南町、JA 長生、種苗会社、(株)クボタなどの関係機関が連携して取り組んだ。

(1) 高収益作物の品目決定

令和 5 年度より、水田土壌で栽培できる品目の情報収集を行い、関係機関と検討を重ねた。当該組合は水稻・麦・大豆のブロックローテーションを中心とした大型機械による土地利用型の営農形態である。組合の労力が少ないことを勘案し、機械を活用でき、従来の栽培品目の作業に干渉しないキャベツとえだまめを最終的に選定、キャベツ 30a とえだまめ 30a を栽培することになった。

(2) キャベツ栽培への伴走支援

ア 先進地視察による情報収集

キャベツ栽培には初めて取り組むため、情報収集のために 5 月 28 日に市原市の農事組合法人 さんわ担い手組合への視察を行った。湿害対策や出荷調製などについて話を聞いた後、定植機などを見学した。関係機関も含め、改めて水田でのキャベツ栽培の難しさを認識した。



写真 1 さんわ担い手組合への視察

イ 栽培への取組

えだまめは組合の豊富な大豆栽培経験で対応できるため、キャベツ栽培に重点的支援を行った。視察の結果、組合は乗用定植機と乗用管理機を導入してセル育苗による栽培を行うことになった。6月26日に栽培講習会を実施、7月19日に播種、8月22日に定植をした。育苗期間中はハウスの最高気温が35℃を超える過酷な状況であった。また、定植予定日の8月16日に来襲した台風7号により、定植準備をした高うねが崩されて定植が遅れた。滞水したほ場は水が引いた後に固く締まり、もみガラを大量投入して100馬力のトラクターでどうにか耕耘・畝立てを行って定植にこぎつけた。農業事務所はこまめな巡回指導を行って栽培の支援を行った。

また、性フェロモンによる大量捕殺トラップを設置し、ハスモンヨトウの防除を行った。捕殺量を見える化することがこまめな病害虫防除に結びつき、虫害が多い年だったにもかかわらず害虫被害は少なかった。



写真2 乗用定植機によるキャベツの定植作業

3 活動の成果

キャベツは11月6日に初出荷となり、直売所等で販売した。

生育期に気温が高く推移し結球が遅れたこと、ほ場内で排水が悪い部分の生育が遅れたことで、定植した12,000株のうち出荷は約1,000株となった。

さらなる排水性の改善と湿害に強い品種の選定が必要と考えられた。



写真3 キャベツの生育状況
(下葉の黄化は湿害によるもの)

4 将来の方向と課題

初めてのキャベツ栽培に取り組み、出荷に至ったのは成功への第一歩となった。作業的にも従来品目と競合することなく栽培できることが検証された。今後、収益性を確保するため排水改善や土づくり、品種選定による収穫量の確保等に取り組むことが必要である。また、キャベツだけでなく、水田で営利的に栽培できる高収益作物の検討を引き続き実施し、長生地域での大規模集落営農モデルの構築に資するよう支援を続けていく。

5 担当者 西部グループ 深見理子

収穫期間の拡大に取り組む生産者の増加に向けて

— 夏ネギ栽培の基本技術の習得支援 —

活動事例の要旨

ネギの収穫期間の拡大に向けて夏ネギの栽培研修会や個別指導により、基本知識の習得等を支援した。その結果、新たに2名が2条トンネル栽培に取り組み始めた。今後は、栽培が軌道に乗るように継続した栽培指導を行い、技術向上を支援していく必要がある。

1 活動のねらい・目標

長生地域では、秋冬・春ネギの栽培が中心となっているが、夏ネギ（トンネル栽培・露地栽培）を取り入れることで、収穫期間の拡大（5～7月頃）が期待できる。また、最近の猛暑により秋冬ネギの夏越しが難しくなっているため、複数の作型を取り入れることでリスク分散に繋がる可能性もある。そこで、収穫期間の拡大にむけて管内のネギ生産者の夏ネギ栽培に関する基本知識の習得等を支援した。

2 活動の内容

（1）管内の栽培事例の整理

長生管内のトンネル栽培事例を把握するために、栽培経験者に1条トンネル栽培3事例、2条トンネル栽培2事例の聞き取りを行った。資材、支柱間隔、被覆タイミング等の具体的な栽培情報を得ることができた。

（2）夏ネギ栽培研修会の開催

昨年を引き続き、8月1日にJA長生ねぎ協議会出荷者及び新規就農者を対象に、夏ネギ栽培（トンネル・露地栽培）研修会を開催し、生産者13名と関係機関が出席した。栽培知識の習得を目的に、農業事務所より1条トンネルと露地栽培、農林総合研究センターより2条トンネル栽培の基本技術について講義を行った。その後、長生管内の栽培事例を示し、参加者で情報交換を行った。栽培未経験者からは経験者の話が具体的で参考になったとの感想や経験者からは栽培技術に対する新たな情報が得られたとの感想があった。また、研修会の中でアンケートを取り、夏ネギ栽培の導入状況や今後の意向を確認した。

（3）設置技術の習得支援

トンネル設置技術の習得を図るために、12月11日に農林総合研究センター東総野菜研究室で開催された夏ネギ実技研修会（千葉県園芸協会主催）への参加を、トンネル栽培導入意向者や新規就農者等に働きかけた。JAからも生産者へ積極的に呼びかけてもらい、長生地域から生産者6名が参加した。実習を通

して、トンネル設置方法について参加者の理解が深まった。



写真1 夏ネギ栽培研修会の様子



写真2 トンネル設置方法を学ぶ生産者

3 活動の成果

夏ネギ栽培研修会でのアンケートで把握したトンネル栽培導入意向者に対して、実技研修会への参加を働きかけるとともに個別指導を行った結果、トンネル設置作業等の技術習得や必要な資材の準備を促すことができ、2名の生産者が新たに2条トンネル栽培を開始した。



写真3 2条トンネル設置圃場の様子

4 将来の方向と課題

新たにトンネル栽培に取り組み始めた生産者が収穫を迎えられるように、引き続き栽培管理や防除指導を行っていく。また、栽培を通して生産者ごとに改善点が見えてくると思われるので、収穫後に生産者と共有してさらなる技術向上を図っていく必要がある。一部の新規就農者からは、関心はあるもののいろいろな作型に取り組むと混乱するので、基本的なネギの栽培管理に慣れてから、導入を検討したいとの意見があった。日頃の個別巡回の中で、栽培状況や労力等を把握しつつ、希望者に対して導入支援をしていく必要があると考えられた。また、夏ネギ栽培では出荷時の気温が高く、品質低下しやすいため、予冷庫の利用が必要となる。生産者の増加に向けて栽培技術の習得支援と併せて出荷体制の整備も必要となるため、今後もJA等の関係機関と連携して活動を行っていく。

- 5 担当者 西部グループ 林めぐみ、安江園子
東部グループ 高原草、深尾聡

女性農業者の主体的な経営参画に向けて

— 長生地域での女性農業者育成への取組 —

1 活動の背景・ねらい

千葉県農業就業人口の約4割は女性が占めており、地域の振興や農業経営の発展において重要な役割を担っている。個々の農業経営の発展や地域農業の活性化には女性農業者の経営参画・社会参画が重要である。長生地域では、家族経営の一員として農業に取り組む女性農業者に加えて、単身またはパートナーと二人で新規参入する女性農業者も増えており、多様なニーズに対する支援が求められている。そこで、女性農業者を対象とした研修会の開催、女性農業者組織の活動支援及び関係機関と連携した男女共同参画の推進に取り組んだ。

2 活動の内容

(1) 農業実践力向上研修会の開催

女性農業者が身近な経営改善に取り組む「実践力」を向上することをテーマに研修会を2回開催した。1回目は6次産業化の具体的なイメージを持つことを目的に、調理機器を扱うメーカーを訪問し、衛生管理について学ぶとともに乾燥野菜やジャム作りなど、農産加工を体験した。2回目は直売に取り組む女性農業者に向けて、販促ツールとして効果的な手書きPOPの作成について実技を交えた講習会を開催した。

6次産業化や直売での販促活動に対する女性農業者の関心は高く、参加者は活発に質問し、熱心に実習に取り組む様子が見られた。また、研修会では初対面の参加者同士も会話が弾み、女性農業者同士の交流が深まった。



写真1 調理機器メーカーでの実演



写真2 手書きPOP研修会

(2) 女性農業者組織活動の支援

長生地域の女性農業者組織であるアグリライフ長生は幅広い年代の会員が在籍し、6名の理事が中心となって研修会等を計画し、意欲的に活動している。理

事会で検討を重ね、今年度は農産加工に関する研修を行うこととなった。6月に地域の伝統食である太巻き寿司作りの講習会を開催した。会員が講師を務め、会員同士で技術研鑽を図った。また、11月には市原市で体験農場を運営する女性農業者を訪問し、こんにやく作りの体験実習を行った。

アグリライフ長生は、ちば県女性農業者ネットワーク（以下、県女ネット）と連携し、県域での活動も行っている。10月に行われた県女ネット主催の研修会には理事4名が参加した。研修会ではライフプランの講演や県女ネット会員が生産した農産物を使用した昼食交流会が行われ、県内各地の女性農業者と交流を図った。11月にはちば農業女子マルシェに参加し、長生地域の農産物のPRや販売活動に取り組んだ。



写真3 太巻き寿司作り



写真4 ちば農業女子マルシェ

（3）男女共同参画地区推進会議及び地域セミナーの開催

市町村、JA、共済組合及び農業事務所における男女共同参画に向けた取り組みを共有するため、7月に長生地域男女共同参画地区推進会議を開催した。会議には関係機関の他、農山漁村いきいきアドバイザーやアグリライフ長生会長も出席し、家族経営協定の締結や女性農業委員の登用など、女性の経営参画、社会参画に向けた課題について意見交換した。

また、同日に開催した長生地域男女共同参画地域セミナーでは、令和4年にパートナーと二人で新規就農した女性農業者から自身の農業経営について事例発表を聞き、パートナーシップ経営について理解を深める機会となった。

3 今後の取組

多様化する女性農業者のニーズに対応できるような研修会を開催し、経営管理能力の向上を図る。女性農業者組織活動を支援し、地域内の先輩女性農業者と新規参入者等の若手女性農業者との情報交換や技術交流を進める。男女共同参画地区推進会議や市町村の技術者連絡会議を通じて関係機関と連携し、主体的な経営参画を目指す女性農業者を支援していく。

- 4 担当者 西部グループ 安江園子
東部グループ 高原草

長生地域の青年農業者の育成

— 長生農業経営体育成セミナーを通じた仲間づくり —

1 活動の背景・ねらい

長生農業事務所では、これからの長生農業を担う青年農業者を対象に、農業経営者としての資質、能力の向上を図るため、農業経営体育成セミナーを実施している。本セミナーは優れた農業経営の実践や実務的な知識・技術を段階的に習得できるように3年間のカリキュラムで構成されている。

今年度は、基本生13名、専門生8名、総合生6名の27名に対し、座学や視察、交流会などを実施し、青年農業者の育成を図った。

2 活動の内容

長生地域では、毎年10名程度の新規就農者がいるが、その年齢は様々で経歴も多様となっている。長生農業経営体育成セミナーでは農業技術や経営のスキルを培うとともに同世代の交流を図り、情報共有や技術の研鑽が図られるよう機会の設置を行っている。

(1) 合同研修での学び

表1 合同研修の実施内容

開催時期	研修名	内容
7月2日	土壌肥料研修	土壌肥料の基礎知識
7月29日	管内視察（安房合同）	農業士及びセミナー生OB視察
8月9日	YPCとの交流会	YPCのOB視察
9月9日	経営研修	制度資金に関する基礎知識
11月28日	管外視察	市場及び6次産業化に取り組む 若手生産者視察
12月16日	農薬使用安全研修	農薬の基礎知識
1月22日	青年農業者会議	県内生産者との交流
1月24日	相互訪問（夷隅）	鳥獣害の知識



写真1 安房合同管内視察（7/29）



写真2 市場（長印船橋青果）視察（11/28）

本年は、研修のすべてを基本生・専門生・総合生の全員を対象とした合同研修として実施し、交流が図れるよう研修を設定した。また、合同研修後には基本生・専門生・総合生に分かれて、営農計画の作成指導やプロジェクト学習の進捗確認を行い、個別の悩みの聞き取りや営農相談が気軽にできるよう努めた。

さらに先輩農業者や他地域の青年農業者との交流会や視察研修等を行った。7月29日に実施した安房地域と合同の管内視察では、安房地域の農業経営体育成セミナー生7名とともに、長生管内の水稻・施設野菜の大規模経営体の経営理念や経営の工夫について学び、今後の経営判断の参考とした。

11月28日に開催した、管外視察では長印船橋青果株式会社を訪れ、物流の2024年問題や千葉の農業の強み、生産者としての将来を見据えた経営判断の方法について学んだ。また、農産物の流通の場である市場の現状と市場流通システムを視察した。その後、6次産業化の優良事例として芳蔵園を訪問し、販売戦略やマスメディアによる農産物の宣伝広告の実態と活用方法について視察を行った。

(2) 関係組織との連携

8月9日に8名の長生管内の若手農業者からなる農業青年団体であるヤングパワーズクラブの（略称 YPC）との交流会、1月24日に夷隅管内の農業経営体育成セミナー生の相互訪問を開催した。長生管内の生産者組織と連携を図ることで先輩農業者と接する機会が増え、農業に対する考え方や経営の参考となった。また、安房地域や夷隅地域の若手生産者と交流を図ることで新たなコミュニティの創出の一助となった。異なる品目、異なる地域で同じ農業に取り組む若手生産者は、研鑽を図るうえで重要な存在となった。

3 今後の取組

研修を通じて土壌肥料や資金制度、農薬等の安全使用など基礎的な知識と共に、実際に農業に携わる中で感じた疑問や悩んでいることを研修で解消する姿が見られた。セミナー生からは「今後、農作業を実施していくときに意識していきたい。」「自分に足りない知識が分かった。もっと学んでいきたい。」等の感想が挙がった。また、視察研修では他地域との交流もあり、「セミナーでは多様な品目の同世代がいるため、いろいろな話が聞けて情報交換ができる。」という感想も挙がった。

長生地域では長生農業独立支援センター経由の新規参入者が年々多くなっており、「情報交換ができる仲間をつくりたい。」「様々な品目の視察がしたい。」など、セミナー生から要望の声が挙がっている。随時、アンケートや研修結果表に研修内容の希望欄を設けることでセミナー生のニーズを把握し必要な能力が培えるよう、農業経営体育成セミナーのカリキュラムの見直しを行い、セミナー生の仲間づくりにもつなげていく。

- | | | |
|-------|--------|------------|
| 4 担当者 | 西部グループ | 高内滯奈、林めぐみ |
| | 東部グループ | 小野瀬優哉、牧野健太 |

いちごの生産安定と品質の向上

— 「長生いちご研究会」活動を通じて —

1 活動の背景・ねらい

長生地区では、近年、いちご経営の新規参入者が毎年のように就農している。今年度の就農者はいないものの、数名が新規参入を目指して研修等を行っている。現在、新規参入者を含め、当地区にはいちごの経営体が14戸あるが、出荷組合はなく、個別に観光いちご狩りや直売等を行っている。そこで、このうちの8戸で学習研究団体「長生いちご研究会」（以下、研究会）を組織した。研究会は県いちご連に加入し、個々の技術向上に努めるとともに、会員間の情報交換や交流の促進を図っている。今年度は、主要な活動の相互ほ場巡回を通じ、育苗初期からの栽培技術向上、新規就農者の定着促進等の支援を行った。

2 活動の内容

これまで研究会では育苗期の後半から定植後、年内までを中心に相互ほ場巡回を行っていたが、今年度は5月から育苗ほ場の巡回を開始し、2月までほぼ月1回のペースでほ場巡回を行った。

（1）育苗ほ場巡回（5～8月）

病害虫のない優良苗の育苗を目指して技術指導や会員間の情報交換等を行った。研究会にはまだ育苗に不慣れな生産者もあり、先輩からの自身の経験に基づく貴重なアドバイスに耳を傾けていた。また、現在自家育苗をしていない新規就農者にも呼びかけ、将来の育苗に備えて参加を促した。

（2）生産ほ場巡回（10～2月）

農薬メーカーとも連携し、定植直後からハダニ類、アザミウマ類などの微小害虫対策としての天敵利用等を中心として指導を行った。研究会員は全員がハダニ類の天敵としてカブリダニを使用しており、年々技術も向上している。また、アザミウマ類などその他の害虫の天敵についても関心が高く、情報提供などの結果、1戸が新たに導入に至った。



写真1 生産ほ場巡回の様子

3 今後の取組

研究会では技術を囲い込まず、積極的に情報交換を行うことで、互いの技術を向上させている。今後もこれを継続するとともに、特に未加入の新規参入者を会へ誘導し、会活動を通じて定着支援を行っていきたい。

4 担当者 西部グループ 本居真一

長生地域で栽培可能な水稻高温登熟耐性品種の検討

— 「にじのきらめき」の栽培適性について —

1 活動の背景・ねらい

近年水稻の登熟期に高温障害を受け、「コシヒカリ」や「粒すけ」などで乳白や背白及び基白など白未熟粒の発生が多くなり、品質や収量の低下が問題となっている。そこで、JA長生と協力し、高温登熟耐性に優れた「にじのきらめき」の栽培試験を行い、長生地域での栽培適性を検討した。

2 活動の内容

(1) 栽培試験の結果

栽培試験は茂原市と白子町の2か所で実施し、「コシヒカリ」と比較をした。令和6年の栽培試験の結果は以下のとおりとなった。

- ・「コシヒカリ」と比べて、出穂期はほぼ同じで、成熟期は5～7日程度遅い。
- ・「コシヒカリ」より稈長が25cm程度短く、耐倒伏性に優れる。
- ・「コシヒカリ」より収量が15%以上多く、多収である。
- ・「にじのきらめき」の乳白や背白、基白などの白未熟粒は、「コシヒカリ」並み～やや多い結果となり、今回の試験では高温登熟耐性は十分に発揮されなかった。



写真1 にじのきらめき登熟期の様子

(2) 栽培のポイント

「にじのきらめき」は、耐倒伏性に優れた多収品種であり、長生地域でも栽培可能である。また、止葉が長く穂が日光に直接当たらないことなどにより、穂温の上昇を抑える「高温回避性」が高い品種であり、栽培管理によって高温登熟耐性の発揮度合は異なってくる。栽培のポイントは以下のとおり。

- ・育苗は苗丈が伸びにくいいため、被覆期間を長くするなど苗丈確保に努める。
- ・成熟期が「コシヒカリ」より5～7日遅いことを考慮して作付けを考える。
- ・多収を得るため、施肥量は「コシヒカリ」の1.5～2倍程度とする。止葉を長くするため、幼穂形成期～出穂期の葉色低下は避けること。

3 今後の取組

栽培のポイントを生産者に周知・指導し、長生地域の「にじのきらめき」の収量・品質向上を目指していく。

4 担当者 東部グループ 佐藤龍一

抑制キュウリの安定生産に向けて

— 酷暑を乗り切る生産対策の取り組み —

1 活動の背景・ねらい

抑制キュウリでは、近年の酷暑により8～9月の樹勢が低下しやすくなっており、そのため変形果や褐斑病が増加し、産地の出荷量の減少を招いている。そのため、JA長生や種苗会社等と共に抑制キュウリの安定生産に向けて対策に取り組んだ。

2 活動の内容

(1) 品種の選定

褐斑病に強い品種を導入するため、令和4年～5年にかけてJA長生の抑制キュウリ部生産班で品種比較試験を行い、主要病害の発生率等を調査した。調査結果を元に有望品種を提案した結果、令和6年には全ての部会員に褐斑病に強い新品種が導入された。病気に強い品種の導入や、防除指導の結果、令和6年作での褐斑病等の病害発生は極わずかとなった。



写真1 品種比較試験の様

(2) 栽培講習会・関係機関との全戸巡回の開催

JA長生の栽培講習会では、酷暑下でも安定生産ができるよう、多頻度かん水や通路かん水、また低段の摘果等の対策方法について生産者に説明を行った。また栽培期間中にJA長生や種苗会社と共に全戸を巡回し、栽培講習会で説明した対策について再度説明するとともに実施の確認を行った。

その結果、令和6年作も酷暑下での栽培であったものの、当産地では例年の9割程度の出荷量を確保することができた。抑制キュウリの市場単価が高く推移したことで、販売金額は3割程上回ることができ、生産者の所得向上に寄与することが出来た。

3 今後の取組

引き続き、新たな高温対策の情報収集を実施し、安定生産に向けて支援していく。

4 担当者 東部グループ 牧野健太

トマト生産力強化の取組

— 関係機関が連携し、テーマを絞った生産指導を展開 —

1 活動の背景・ねらい

トマト生産者の栽培技術と所得の向上、JA長生施設野菜部会の出荷量の増加を目指して、部会・全農・全農ちば・JA長生と連携して講習会の開催や全戸巡回の強化を行い産地の生産力強化に取り組んだ。

2 活動の内容

(1) 各種講習会

7～8月には「猛暑対策」をテーマに、育苗期から定植後までのかん水管理や定植のタイミングについて、栽培講習会を開催した。後日、生産者同士の「苗活着意見交換会」を実施し、各ほ場の定植前後のかん水管理について意見交換を行った。ほ場によって環境条件や設備が異なるが、今までの経験よりのかん水量を多くするよう呼びかけた。また、11～12月には「温湿度管理」をテーマに、カーテンや暖房機の活用方法等について栽培講習会を開催した。早朝加温の具体的な方法や天窓・カーテンを徐々に開ける効果等を解説した。

病害虫対策として、「病害虫防除講習会」を開催した。特にコナジラミ類の生態や総合的な防除の重要性と方法について、詳しい解説を行った。この講習会は出席率が高く、生産者の関心が高い内容であることが把握出来た。

(2) 全戸巡回

今年は作型ごとの巡回を強化し、関係機関で全戸を訪問した。関係者が同時に現地確認することで、各ほ場の課題を共有することができた。併せて、種苗メーカーや県試験場の研究員等とともに、品種やハウスの特性、生育状況に応じてきめ細やかな指導を行った。



写真1 現地巡回の様子

(3) 結果

各講習会や巡回後、学んだ内容を実践した生産者がいたことや、部会全体でも夏期の活着がうまくいったことなどから、栽培意欲と技術の向上に繋がった。

3 今後の取組

産地の生産力強化を図るために、引き続き月1回程度の頻度で、時期ごとに最もふさわしいものをテーマに取り上げて栽培講習会等を実施する。生産者の出席率を上げるため、全体への呼びかけを強化する。さらに、講習会で使う用語や基礎的な内容を取り上げた勉強会を実施する予定である。

4 担当者 東部グループ 富田成美、牧野健太

乳量確保及び長命連産による生産性の向上を目指して

— 牛伝染性リンパ腫（EBL）感染対策の取組 —

1 活動の背景・ねらい

近年、飼料・資材の高騰や子牛価格の低迷に加えて、搾乳牛の死廃は酪農経営の大きな負担となっている。そこで、乳量確保及び長命連産による生産性の向上を目指して、家畜保健衛生所、市原乳牛研究所と連携し、死廃要因の一つである牛伝染性リンパ腫（EBL）の感染対策に取り組んだ。

2 活動の内容

（1）関係機関との体制及び支援

県の補助事業を活用して、家畜保健衛生所と市原乳牛研究所との支援体制を整えた。また、EBLの感染程度を明らかにするため、関係機関と協力しサンプリング（採血）を実施した。検査結果を共有し、それをもとに農場で実施可能な対策を検討した。農家への結果の報告と検討した感染対策の提案を行い、今後の感染対策の取組の流れについて確認を行った。



写真1 サンプリング（採血）の様子

（2）感染対策に向けた取り組み

EBLの感染は、感染牛の血液を介して伝播する。具体的には吸血昆虫の媒介及び直接接触によるものとされている。感染防止には感染牛との一定の距離を置く必要がある。そこで農場において、感染牛と非感染牛を離れた飼育管理を提案した。その結果、搾乳牛では感染程度によって異なる色のタグを導入することとなった。色付きタグを耳標に装着することで色別に牛の配置を行い、感染牛と非感染牛の隔離をして感染対策を行う予定である。

3 今後の取組

引き続き、家畜保健衛生所と市原乳牛研究所と連携し、感染対策の導入支援と指導を行っていく。また、牛群検定データを活用し、EBL感染牛と非感染牛の生産性の比較及び対策実施後の状況確認を行い、乳量確保及び長命連産での生産性の向上につながる支援を行っていく。

4 担当者 東部グループ 川津夕夏

タマネギの収穫機械実演会の開催

～規模拡大を目指した機械導入に向けて～

長生農業事務所改良普及課 令和6年5月02日発

農業事務所では、タマネギ産地の維持発展に向けて、規模拡大を目指した機械導入を推進しています。

4月23日にタマネギ生産者を対象に、機械導入した際の収穫作業の省力効果を確認して貰うために、タマネギ収穫機の実演会を開催したところ、関係機関を含め33名の参加がありました。当日は、JA長生、機械メーカーの協力のもと、茎葉処理から掘起こし、拾上げ作業まで一連の流れを実演しました。長生地域のタマネギは柔らかいため、ピッカー以降の工程では傷を防ぐ対策が必要ですが、掘起こしまでの作業は機械化できることが確認できました。生産者から、根切機やピッカーに興味を示す声が挙がりました。

農業事務所では、今後も費用対効果などを検討しながら、作業の省力化と規模拡大に向けた機械導入を目指して支援していきます。

※ピッカーは掘起こされたタマネギを拾上げて、コンテナに集める収穫機械。



収穫機械について説明



収穫機械実演の様子

1 千葉県ホームページに掲載希望

情報発信者

長生農業事務所改良普及課

普及技術員

高原 草

JA 長生施設野菜部会 アールスメロン部が視察研修会を実施

～「道の駅とみうら 枇杷倶楽部」・「道の駅おおつの里 花倶楽部」を訪問～

長生農業事務所改良普及課 令和6年6月25日発

JA 長生の「^{ながいき}長生メロン」は、上品な甘さと香り、見た目の美しさが特徴のアールスメロンです。アールスメロン部では、部会の栽培技術の向上や販売方法の情報収集を目的に、南房総市の道の駅2か所の視察研修を開催し、生産者や関係機関12名が参加しました。

枇杷倶楽部では、アールスナイトなどのアールスメロンが栽培されていました。こちらでは「オーナー制度」を活用しており、栽培管理は枇杷倶楽部が行い、収穫期にオーナーが来訪し、収穫体験ができるそうです。収穫しやすいように下葉は摘葉され、果実が一直線に管理されていました。花倶楽部では、タカミなどのハウスメロンが栽培されており、地元への直売がメインとのことでした。参加者からは、品種特性や草勢の維持方法、生育過程の宣伝方法などについて質問が挙がり、活発な意見交換がされました。

農業事務所では今後も生産者の技術力向上を支援し、産地振興に取り組んでいきます。



アールスナイト



管理者から説明を聞く様子

1 千葉県ホームページに掲載希望

情報発信者

長生農業事務所改良普及課

普及技術員 富田 成美

長南町東部営農組合でキャベツの栽培が始まりました

～集落営農組織の高収益作物導入による経営改善支援～

長生農業事務所改良普及課 令和6年9月3日発

長南町東部営農組合は昭和59年に設立され農家数約200戸、水田面積172haで水稲、大豆、小麦を生産する農事組合法人です。令和元年に農地中間管理機構関連農地整備事業に着工し暗渠排水の整備を行っています。排水改善により高収益作物の栽培が可能になり、今年度からキャベツとえだまめ各30aの栽培に取り組むことになりました。

7月19日にキャベツの播種、8月22日にほ場への定植を行いました。当該地域は重粘土質土壌で野菜類の栽培が難しいため、堆肥等による土壌改良や明渠による排水対策など万全の準備を行いました。また、初めてのキャベツ栽培のため、JA、種苗会社、機械メーカー、農業事務所と綿密な連携の下に栽培に取り組んでいます。

農業事務所では11月の収穫に向け、関係機関と連携して栽培の支援を続けるとともに、地域の集落営農モデルとして育成し、地域農業の発展を促すよう活動を進めます。



セルトレイへの播種作業



乗用定植機による定植

1 千葉県ホームページに掲載希望

情報発信者

長生農業事務所改良普及課

主任上席普及指導員 深見 理子

普及技術員 高内 滯奈

夏ネギ栽培技術の向上を目指して

～夏ネギ栽培研修会（トンネル・露地栽培）の開催～

長生農業事務所改良普及課 令和6年 9月 3日発

農業事務所では、8月1日にネギ生産者を対象に、夏ネギ栽培（トンネル・露地栽培）の栽培知識の習得と生産者間の情報交換を図るために研修会を開催しました。当日は、夏ネギ栽培経験者及び未経験者13名と関係機関が参加しました。

農林総合研究センター東総野菜研究室からは2条トンネルによる早出し栽培、農業事務所からは1条トンネル栽培、露地栽培の要点について講義を行いました。また、JA長生からは夏ネギの出荷規格について説明がありました。その後、参加者間で長生地域のトンネル栽培事例を参考に情報交換を行い、さらに理解を深めました。

参加した生産者からは、「トンネル栽培技術の情報を新たに得られた」、「栽培経験者の話が聞けて参考になった」等の感想が聞かれました。

農業事務所では、今後もネギ産地の活性化のための支援をしていきます。



講義を聞く参加者



情報交換の様子

1 千葉県ホームページに掲載希望

情報発信者

長生農業事務所改良普及課

普及指導員 林 めぐみ

「長生農業フォーラム2024」を開催

～農産物販売をテーマに活発な討議が行われる～

長生農業事務所改良普及課 令和6年11月27日発

11月19日、長生村文化会館において、長生地区指導農業士会等の関係4団体と農業事務所の共催により、「長生農業フォーラム2024」が開催され、長生地域の農業者や関係機関等から197名が参加しました。

今年度は、「農産物販売の新たなホライズンー未知の市場を切り拓く勇気ー」というテーマのもと、スーパーや加工業者等と直接取引を行っている千葉市及び旭市の生産者2名から、地域や取引先から必要とされる経営のポイントや生産と消費を繋げるサービスのコツについて講演いただきました。また、講演者に加え、農産物流通の専門家や地元の農協職員、生産者によるパネルディスカッションも行われ、販売や生産の工夫について掘り下げた討議が行われました。会場からは活発に質問が寄せられ活気あるフォーラムとなりました。農業事務所では、今後もフォーラム等の開催を通じて地域農業の活性化を図ります。



講演の様子



パネルディスカッションの様子

1 千葉県ホームページに掲載希望

情報発信者

長生農業事務所改良普及課

主任上席普及指導員 深尾 聡

経営体育成セミナーで視察研修会を開催しました！

～流通の仕組みや付加価値を高める方法について～

長生農業事務所改良普及課 令和6年12月12日発

長生農業事務所では、新規就農者を対象に次代の地域農業を担う人材を育成することを目的に、長生農業経営体育成セミナーを開催しています。11月28日に市場流通と販売戦略を学ぶ視察研修会を開催し、13名の参加がありました。

長印船橋青果では流通のシステム、売り先、価格決定の仕組みについて説明を聞くとともに、場内や出荷物の見学を行いました。船橋市梨生産者の芳蔵園では梨の直売と6次産業化について話を聞き、農園カフェでのメニューの試食を行いました。

参加したセミナー生からは、「市場流通や価格決定の仕組みについて学ぶことが出来た。」「必要とされる品目、品質の物を作ることで利益につながることを学べた。」「6次産業化や雇用についての話が聞いて有意義な視察となった。」等の感想が聞かれました。

長生農業事務所は、今後も新規就農者の経営安定に向けて支援を行います。



長印船橋青果で市場流通について話を聞く



芳蔵園の農園カフェで6次産業化の話を聞く

1 千葉県ホームページに掲載希望

情報発信者

長生農業事務所改良普及課

普及指導員 小野瀬 優哉

主な出来事

日 時	内 容	場 所	参加者数
4月11日	小菊の会栽培講習会	長生合同庁舎	12
4月23日	玉葱収穫機械実演会	白子町	23
5月15日	長生いちご研究会育苗ほ場巡回	茂原市、一宮町	9
5月17日	長生地区指導農業士会サツマイモ苗定植指導	東浪見小学校	2
5月21日	経営体育成セミナー開講式	長生合同庁舎	17
5月28日	集落営農視察研修会	市原市	14
6月3日	長生いちご研究会役員会	長生合同庁舎	3
6月5日	長生地区指導農業士会第1回理事会	長生合同庁舎	10
6月10日	長南町蓮根組合総会	JA長生長南支所	15
6月11日	長生いちご研究会総会	長生合同庁舎	8
6月12日	農産加工技術研修会	長生村文化会館	12
6月18日	長生農業フォーラム2024第1回実行委員会	長生合同庁舎	15
6月20日	長生いちご研究会育苗ほ場巡回	茂原市、一宮町	8
6月25日	小菊の会ほ場巡回	茂原市、長生村	11
7月1日	小菊の会ほ場巡回	長南町、長柄町	11
7月2日	経営体育成セミナー土壌肥料研修	長生合同庁舎	19
7月8日	農山漁村男女共同参画長生地区推進会議	長生合同庁舎	17
7月8日	男女共同参画地域セミナー	長生合同庁舎	17
7月11日	長生地区指導農業士会家族交流会	長柄町	20
7月16日	長生いちご研究会育苗ほ場巡回	茂原市、一宮町	7
7月29日	経営体育成セミナー管内視察	一宮町	12
8月1日	夏ネギ栽培研修会（トンネル・露地栽培）	長生合同庁舎	18

主な出来事

日 時	内 容	場 所	参加者数
8月7日	長生農業フォーラム2024第2回実行委員会	長生合同庁舎	15
8月7日	トマト苗活着意見交換会	一宮町	8
8月9日	経営体育成セミナー交流会	茂原市	7
8月9日	長生ヤングパワーズクラブ相互訪問	茂原市	16
8月28日	長生いちご研究会育苗ほ場巡回	茂原市、一宮町	6
9月3日	長生地区指導農業士会第2回理事会	長生合同庁舎	5
9月9日	経営体育成セミナー経営研修	長生合同庁舎	12
9月25日	トマト生育調査 現地目合わせ会	白子町、一宮町	10
10月3日	農業実践力向上研修会（第1回）	ホシザキ関東株式会社千葉支店	10
10月4日	新規就農者向けねぎ栽培管外視察研修会	匝瑳市、山武市	26
10月10日	長生いちご研究会ほ場巡回	長柄町、茂原市、一宮町	6
10月29日	長生地区指導農業士会サツマイモ収穫指導	東浪見小学校	3
10月29日	千葉県農業士協会地域交流会	茂原市東部台文化会館	50
11月6日	アグリライフ長生視察研修会	市原市、木更津市	10
11月7日	長生農業フォーラム2024第3回実行委員会	長生合同庁舎	15
11月14日	長生いちご研究会ほ場巡回	長柄町、茂原市、一宮町	11
11月19日	長生農業フォーラム2024	長生村文化会館	197
11月20日	小菊の会反省会	長生合同庁舎	10
11月28日	経営体育成セミナー管外研修	船橋市	14
12月3日	農業経営研修会	長生合同庁舎	18
12月3日、4日	長生地区指導農業士会県外視察研修会	長野県	6
12月16日	経営体育成セミナー農業使用安全研修	長生合同庁舎	12

主な出来事

日 時	内 容	場 所	参加者数
12月19日	長生いちご研究会ほ場巡回	長柄町、茂原市、一宮町	11
1月17日	農業実践力向上研修会（第2回）	長生村交流センター	12
1月21日	トマト生産力強化事前講習会	一宮町	15
1月22日	経営体育成セミナー青年農業者会議	千葉市教育会館	5
1月22日	長生いちご研究会ほ場巡回	長柄町、茂原市、一宮町	11
1月23日	小菊の会総会	茂原市	11
1月24日	経営体育成セミナー夷隅相互訪問(鳥獣害について)	御宿町	12
1月27日	就農啓発講座	一宮町、いすみ市	37
2月5日	アグリライフ長生総会	近藤いちご園	25
2月18日	長生農業フォーラム2024第4回実行委員会	長生合同庁舎	15
2月28日	経営体育成セミナー閉講式	長生合同庁舎	20

令和6年度普及活動の実績
普及活動の軌跡
(Part-30)

発行年月 令和7年3月

発行 千葉県長生農業事務所 改良普及課

〒297-0026

千葉県茂原市茂原1102-1

TEL 0475-22-1771

FAX 0475-25-2061

URL <https://www.pref.chiba.lg.jp/ap-chousei>